

6 仕事や住まいを失うこと

平成 14 年 8 月にホームレスの自立の支援等に関する特別措置法が施行されました。この法律において、ホームレスは「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」と定義づけられました。厚生労働省が令和 3 年 1 月に実施した調査では、全国のホームレスの数は 3,824 人となっており、都市部に集中していることが示されました。平成 15 年 1 月に初めて実施された調査では、25,296 人でしたので、21,472 人減少したことになります。

しかし、今ではこの数値に反映されないいわゆるネットカフェ難民等が急増し、こうした見えないホームレスの数を合わせると、今もなお、多くの人が不安定な場所で夜を過ごしていると考えられます。

ワーク 1

- (1) ホームレスとなった状態での生活は、どのようなことで困るか考えてみましょう。

- (2) ホームレス状態になる経緯は、仕事を失う、借金や病気、家族との離別など、人それぞれです。きっかけは様々ですが、共通しているのは、問題が起こったその時に、頼ったり、相談したりする人や場所、または機会がなかったということです。これは誰にでも起こり得ることです。もし、ホームレスであることを理由に、侮辱されたり、暴力を振るわれたり、差別されたりしたならば、その人はどのような気持ちになるか考えてみましょう。また、グループで話し合ってみましょう。

- (3) ホームレスの問題を解決するためにどのような対策が必要か書いてみましょう。

ワーク 2

次の文章は、湯浅誠さんの著書『『なんとかする』子どもの貧困』から抜粋したものです。文章を読んで、後の質問に対して答えてみましょう。

上から見てもわからない

たらいに水が溜まらない。どこかから漏れているらしい。さてどうするか。

下から見ればいい。たらいの上から目を凝らしても、漏れている箇所は見つからない。たらいの下から見れば、どこから漏れているか、一発でわかる。貧困対策と地域づくりの関係は、ここに示されている。

ふつうにしていれば大丈夫。じゃあふつうじゃなくなったら？

私たちの多くは、なんとか暮らしている。なんとか暮らせていると、なかなか世の中の穴には気づかない。「ふつうにしていればなんとかなるはずなのに、どうしてなんともならない人間が生まれるのか」と不思議に感じてしまう。「何も問題はないはずなのに」と。

しかし、いったん歯車が狂い始めると、「何も問題はない」どころか、「問題だらけ」であることに気づいたりする。それは、自分がトラブルに見舞われた場合にかぎらない。家族の誰かが病気をする、高齢の親がケガをする、認知症になる、子どもが保育園に入れない、障害や難病を抱えて生まれた、大学受験や就職に失敗したことがきっかけでひきこもってしまった、等々が起こると、①「ふつうにしていればなんとかなるはず」とついこの前まで感じていた自分が、突然遠い存在に感じられる。

たらいを共有してしまっている以上は

たらいの穴から落ちるまでは、まさか自分が落ちるなどと思わず、穴にさえも気づかない。穴から落ちて初めて、穴があったことに気づく。一生、落ちない人もいる。その人は幸せだ。他方、「まさか」ということになる人もたくさんいる。

だから、穴に落ちた人は貴重だ。穴のありかを教えてくれるから。別にえらいわけではない。うまく説明してくれるとも限らない。しかしその存在が、私たちに穴のありかを教えてくれる。

そして、穴がわかり、穴がふさがれば、今後そこから落ちる人がいなくなる。それは、単なる「弱者救済」を超えて、たらいを共有するすべての人の利益となる。だからそれは、②自分たちの負担において誰かを助けるという話ではない。そうではなく、自分たち自身が助かるために必要なことだ。水も漏らさぬ地域づくり、社会づくりができれば、私たちはどれだけ安心して暮らせることだろう。きっと、いくら貯金しても足りないと感じる不安や焦りからも解放されて、消費も伸びることだろう。

- (1) 湯浅さんは、貧困について①のように表現し、誰にでも起こり得る問題としています。さらに、②のように貧困の解決のためできることを挙げています。水も漏らさぬ地域づくり、社会づくりに必要なことは何か考え、書いてみましょう。

- (2) 水も漏らさぬ地域づくり、社会づくりのため、あなたにできることは何か考えてみましょう。

あなたの考え

- (3) グループで話し合ってみましょう。

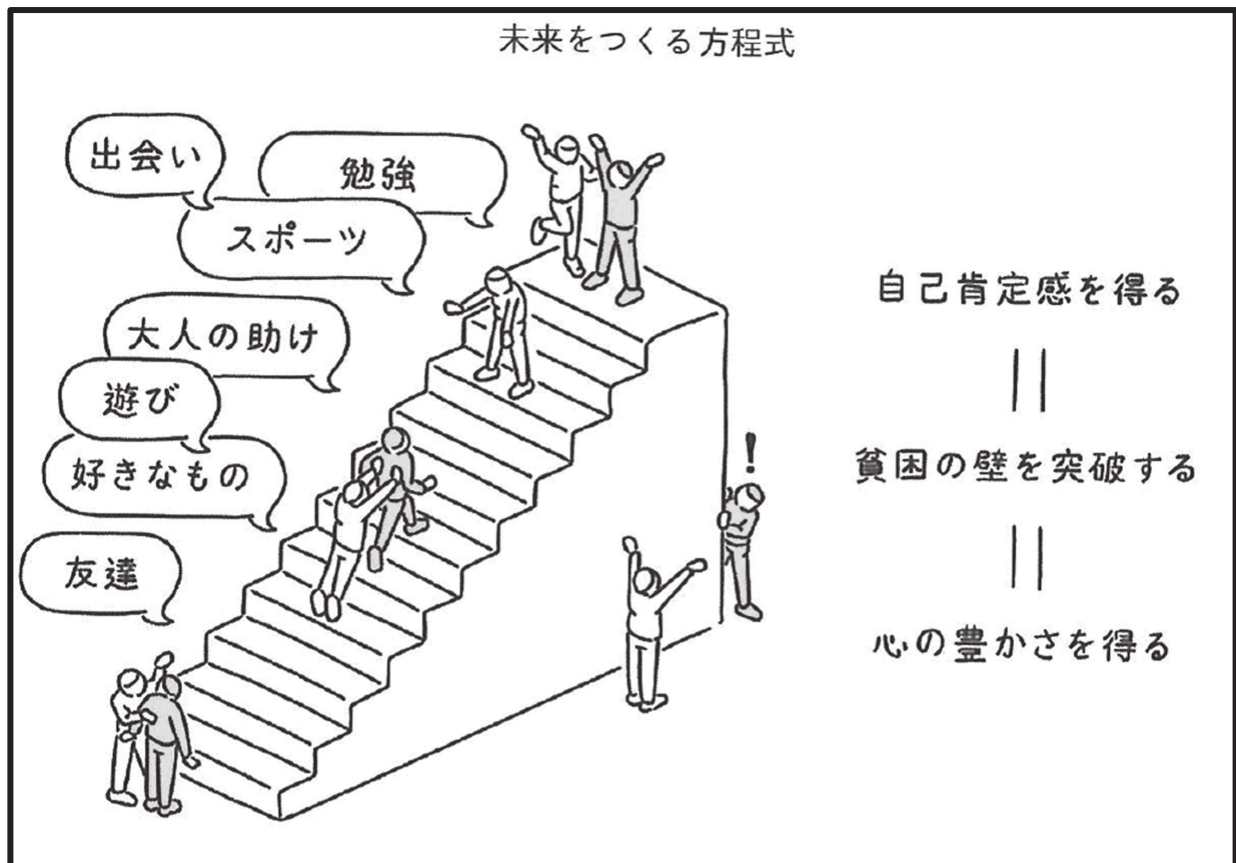
グループで出た意見など

ワーク 3

次の文は、石井光太さんの著書「本当の貧困の話をしよう」から抜粋したものです。

僕がずっと自己否定感でなく、自己肯定感を得ようと言っているのは、それが貧困から脱する方法であるのと同時に、心の豊かさを手に入れる方法でもあるからだ。

とはいえ、今の日本にはまだ貧困の問題があり、苦しんでいる人たちがたくさんいる。君にしたって、自分の生活さえ良ければいいとは考えないよね。貧困問題を解決することは、日本を住みやすい国にすることであり、君をより幸せにすることでもある。



挿絵は、寄藤 文平氏によるものです。

- (1) 「未来をつくる方程式」にある絵の中にある、“出会い”“勉強”“スポーツ”“大人の助け”“遊び”“好きなもの”“友達”はあなたの未来をつくる上でどんな役割を果たすか書いてみましょう。また、あなたの未来をつくる上で他に大切にしたいものがあれば書いてみましょう。

- (2) 本日の学習をとおして、学んだことや未来をつくるためにあなたが考えたことを書いてみましょう。

解説 仕事や住まいを失うこと

1 ねらい

「ホームレス状態」に至るまでの経緯は、様々な背景が複雑にからんでおり、「ホームレス状態」に至る理由の一つひとつ（失業、病気、けが等）は、誰にでも起こり得る事であり、自分自身でコントロールすることが困難な出来事でもあることに気づかせたい。そして、ホームレスの問題は決して他人事ではないこと、身近な問題であることを理解できるよう学習を進める。また、ホームレス状態を自分自身にも起こり得ることとしてとらえ、ホームレス状態であることを理由に、差別や偏見の目にさらされる人々の気持ちに寄り添うことで人権意識を育むとともに、ホームレスをなくすのは、地域社会全体の問題であり、そうした地域社会をつくるために自分ができることがあることに気づかせるよう留意する。

2 進め方

展開例（50分 3～5人のグループを作る）

学習活動	指導上の留意点
1 ワーク1 (20分) ① ホームレスとなった状態で困ることを考えてみる。 ② 差別、誹謗中傷、暴力について考え、グループで話し合う。 ③ ホームレスの問題の解決のためにどんな対策が必要か考えてみる。	○ ホームレスは誰にでも起こり得ることがきっかけであることを理解するよう促す。また、そうした生活に陥った人の気持ちを考え、差別、誹謗中傷、暴力することについて意見交換して他者の意見を聞いて、自分の行動に生かすよう促す。
2 ワーク2 (20分) ① 文章を読んで、地域づくり、社会づくりに必要なことを考える。 ② 自分にできることは何か考え、グループで話し合う。	○ 貧困に直面することは「誰にでも起こり得ること」であり、それは社会の構造的な問題であることに気づくよう促す。 ○ 地域社会の一員としてできることを理解するよう促す。
3 ワーク3 (10分) ① 文章や絵を見た上で、気づいたことや考えたことを書く。	○ 未来をつくるために大切なことは何かを考えるよう促す。時間があればグループで話し合ってもよい。

3 解説

(1) ワーク 1 について

仕事を失うことや借金、病気、人間関係の悪化といった、自分にも起こり得る困難がきっかけとなり、ホームレスとなることに気づかせたい。

また、そのような生活における困難のただ中にあるホームレスの人々の気持ちに寄り添い、差別や暴力を受ける人の気持ちを理解し、自分のとるべき行動を考えさせたい。さらに、そうした状況とならないようにすることが地域社会にとって必要であることを考えさせたい。

(2) ワーク 2 について

ワーク 1 で考えたことを踏まえながら、そうした状況にならないためには「ふつうにしていれば大丈夫」ではないことを知り、今自分ができる地域づくり、社会づくりに必要なことを考えるよう促す。グループで意見を交換して深めるようにしてもよい。

さらに、水も漏らさぬ地域づくり、社会づくりのために自分ができることを考えるよう促す。

(3) ワーク 3 について

どんな未来を考え、そのために必要なことは何かを考える。心の豊かさを得ることが重要であることに気づかせ、そのためにできることを考える。未来を描くことは自分であることに気づかせたい。

<引用文献>

- ・『なんとかする』子どもの貧困 湯浅誠 著 角川新書 平成 29 年 9 月
 - ・「本当の貧困の話をしよう」 石井光太 著 文藝春秋 令和元年 9 月
- 挿絵：寄藤文平 作

<参考資料>

- ・「ホームレス・貧困問題を解決し、誰もが生きやすい社会をつくる～ホームレス問題の現状」 認定NPO法人ビッグイシュー基金
- <https://bigissue.or.jp/homeless/>